

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520403
 研究課題名 (和文) 大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための
 統合・協働的カリキュラム
 研究課題名 (英文) Curriculum development in Japanese language teaching for university
 students to suit the social needs: Integrated and Collaborative
 approaches
 研究代表者
 大島 弥生 (OSHIMA YAYOI)
 東京海洋大学・海洋科学部・准教授
 研究者番号：90293092

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための、統合的かつ協働的アプローチを重視したカリキュラムの開発を目的としたものである。複数分野での日本語母語・非母語話者大学生に対する授業実践を対象に、授業の内容・方法・シラバス・教材・効果の分析を行い、専門とことばの学習を統合したカリキュラムおよび授業のモデルを提示した。また、授業における学習者間の相互行為の分析をもとに、異文化に属する学習者間の学びを中心とした学習者間の協働学習の様々な手法を提示した。

研究成果の概要 (英文)：

In this study, we offered various models for the courses and activities of Japanese language learning for university L1 and L2 students in various disciplines in order to suit the social needs. In these curriculum developments, we adapted integrated and collaborative approaches to elicit interactions among students, especially multicultural participants.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	500,000		500,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,300,000	840,000	4,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：

- (1)日本語表現能力 (2)アカデミック・ジャパニーズ (3)ピア・レスポンス
 (4)協働的アプローチ (5)初年次教育 (6)ワークショップ
 (7)カリキュラム (8)アカデミック・ライティング

1. 研究開始当初の背景

日本語教育分野においては近年アカデミック・ジャパニーズの教育・研究が盛んになっ

てきている。その内容は、①専門分野での論文作成の支援、②専門分野の講義理解と分野特有語彙の理解の支援、③専門での学習の基

礎を支える論理的思考力・表現能力と学習ストラテジーの育成の3種に大別できるだろう。①②はテキストのコーパス分析にもとづく研究と教材開発が早くから進められているが、目標言語は分野ごとの学術的側面に偏っている。③は特に近年必要性が提唱されているが、具体的な実践の紹介はまだ少ない。

本研究が目指す実践的カリキュラムの発信・提案は、「大学生・学部留学生の日本語」表現力育成分野での手法の確立という点で、現在必要とされているものである。近年の大学生（母語話者・非母語話者）の多様化、いわゆる日本語力の低下という状況下での「大学生の日本語」表現力育成の重要性は、より広範に認識されるようになってきた。開講科目数は増え、担い手の数は増大したものの、分野としての教育手法は確立したとはいえない。実践の蓄積は増えたが、多分野に散在し、散発的、個別的で、全体像が見えにくいため、手法を共有して利用する際の選択肢がいまだに明確ではない。本研究は、実践を通じてアプローチの有効性を検証しつつカリキュラム実現への情報提供を広範囲に行おうとする点で時宜を得ている。

2. 研究の目的

本研究は、大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための、統合的かつ協働的アプローチを重視したカリキュラムの開発を目的とする。複数分野（①医療・看護、②体育学・舞踊学・幼児教育学、③人文科学・日本語教師養成分野、④メディア学・国際関係学、⑤情報学・ビジネス、⑥水産学・海洋科学・食品流通分野）での実践を対象に、授業の内容・方法・シラバス・教材・効果の分析を行い、カリキュラムや活動のモデルとして提示することを目指した。その前提として、各分野において大学教育への社会的要請を考察し、それに応える日本語表現能力を探った。同時に、専門に限らず、生涯にわたる社会人、市民として必要とされる日本語表現能力も育成の対象とした。

3. 研究の方法

本共同研究においては、とくに<統合的アプローチ> <協働的アプローチ>を中心的に取り上げ、複数の専門分野での研究成果を統合することより、汎用性の高いカリキュラムの構築を試みた。そこでは、非母語・母語話者双方を対象とし、従来別々に行われてきた表現能力育成の手法を統合する形で、双方に資するカリキュラム構築を目指している。

● <統合的アプローチによるカリキュラム設計>

- ・言語や文章の産出プロセスの中で、読む・聴く・話す・書く訓練を相互に関連づけ、

複数の技能訓練を統合する。

- ・日本語表現能力の獲得と同時に、内容・知識、および内容・知識への分析的視点、学習ストラテジーと自己モニター力の獲得を目指す。すなわち、コトと言葉の学習を統合する。
- ・初年次の導入教育、情報リテラシー教育、メディア教育、キャリア教育など、大学において行われる様々な教育分野・手法と言語表現能力育成との統合を試みる。

● <協働的アプローチによるカリキュラム設計>

- ・学習者間の協働学習を促す。特に、異文化に属する学習者間の学びなど、授業の個々の参加者の違いを重視し、それを利用するアプローチを採る。
- ・異分野の教師間の協働を進める。

本共同研究においては、これらの発想により、多様な対象者に対応し、各大学の専門分野を生かし、状況に則した実現を容易にしている。

また、授業実践の分析には、授業や活動の設計の記述のほか、学習者のアンケートや振り返り記述の分析、学習活動の会話分析・相互行為の分析、産出された文章のジャンル分析等を採用している。

4. 研究成果

(1) 現状の分析

本共同研究においては、まず、大学初年次教育における現状の日本語表現能力育成の中身と手法の大まかな分類を行い（論文24）、これまで行われてきた実践の分類（論文18）を行っている。また、大学における留学生の位置づけおよび留学生教育の方向性について、近年の話題である「留学生30万人計画」と関連付けて総括（論文1）を行った。

(2) 「統合的カリキュラム」に関する研究

<統合的アプローチ>にもとづくカリキュラムや活動に関しては、大学初年次教育でのコト（内容）の学びや学習スキルの習得と結びついた「日本語表現法」科目のレポートについて、その談話的な特徴（論文19）や作成プロセスにおける学習者の変容（論文17）について論じ、大学の日本語表現能力育成授業においてできることの可能性を考える基礎データとしている。

また、各大学の分野や特徴に応じた日本語表現能力育成授業のあり方について、実践を通じて可能性を探り、統合的カリキュラムの今後の方向性を論じている。具体的には、キャリア教育との統合（論文2）、体育学部の学生の特性を活かした教育、メディア・リテラシー教育との統合（論文5）、日本語教員養成

課程での留学生と母語話者学生との協働学習の試み(論文10)からなる。

とくに医学部系においてはコミュニケーション能力や日本語表現能力の重要性がかねてから注目されているが、本研究においては初年次教育などでの取り組みのあり方や具体的な方法において、考察を重ね、提言を行った(論文11, 14, 15)。

さらに、大学教育に対する導入・移行段階への対応として留学生やバイリテラシーのケースでの教育のあり方について、提言を行った(論文25ほか)。

(3)「協働的カリキュラム」に関する研究

<協働的アプローチ>を採用したカリキュラムや活動の研究としては、日本語教育分野での協働的学習についての研究の流れを概観(論文9)し、その中での学習者間の相互行為の分析を行った。とくに焦点を当てた現象は、協働推敲の中でのやり取り(論文26)や情報の交渉(論文20)、習得に資する可能性のある語の選択支援(論文7)、グループ作業における話題展開の諸相(論文21)などである。

また、留学生や母語話者の授業で実際に協働学習の手法を取り入れた実践を取り上げ、その設計と留意点を論じた。グループ・ディスカッションやプロセス・アプローチのレポート作成における相互質問のような母語話者対象の実践(口頭発表)のみならず、初級段階の日本語学習者を対象とした実践(論文22)にも応用可能であることが示されている。

一方で、狭義の言語表現授業だけでなく、授業内で学習者がお互いの考えを理解しあうための手法としても、携帯電話を利用した実践(口頭発表)、ライティング・ワークショップ実践(論文3)、ジグソー型ブックトークを利用した実践(論文6)が紹介されている。

(4)「異文化間の協働的カリキュラム」に関する研究

大学において日本語母語話者・非母語話者がともに学びあう異文化間の協働学習が、近年、とくに重要性を増している。(4)はこのような実践の設計と実際を紹介したものである。論文8は、大学における日本語教師による4つの異なる実践を報告し、共通する課題や留意点と効果について、学会のパネル・セッションにおいて参加者を交えて議論したものである。具体的には、留学生の日本語クラスにおける日本人大学生のビジターとしての参加、必修の「日本語表現法クラス」における相互行為の発話特徴、身近な問題提起から周囲への働きかけにつながる社会実践の活動、異文化混成日本事情クラスにおける「日本社会」観をめぐるやり取り、という

事例からなっている。

論文4は、このような「他者を理解するためのことばの力」を育成する場としての大学授業での協働学習の重要性を指摘している。論文5は異文化混成日本事情クラスにおける学びの場の設計についても論じている。

このような異文化間の協働の学びの場における相互行為を分析したものとして、論文23はレポートのピア・レスポンスにおける両者の発話を分類し、そこでの学びの限界と可能性を論じている。論文13は、留学生のスピーチ作成のプロセスにおける日本人学生の関与の諸相と協働の学びにつなげるための留意点を示したものである。

(5)まとめ

これらの一連の研究を通じ、大学における日本語表現能力育成の場において、<統合的アプローチ><協働的アプローチ>の有効性を示した。それと同時に、参加者の特性や科目の目的を生かしながら、具体的にどのような活動を盛り込み、その活動の中でどのような相互行為と学びが生じるかについても明らかにした。

また、協働的アプローチの手法に対する広範な理解を促進するため、科研費プロジェクト「統合・協働的カリキュラム」公開研究会として、19年度には「協働的アプローチによる日本語表現能力育成授業と活動理論」と題して活動理論の専門家を招いた研究会(参加者80名)、20年度には「日本語表現能力育成授業における協働的意味構築の試み」と題して、メディア・リテラシーの専門家を招いた研究会(参加者75名)を行い、実践のデザイン、成果について報告した。さらに、それらの研究会において教師・研究者対象のワークショップを開き、意見交換を行った。これらの成果から、両アプローチに関して今後の応用・発展が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

2010年

- 1 茂住和世(印刷中)『『留学生30万人計画』の実現可能性をめぐる一考察』東京情報大学研究論集13(2) 査読有
- 2 大場理恵子2010「キャリア教育とアカデミック教育を融合した日本語表現法授業の実践例-キャリア教育とアカデミック教育に共通する基礎力の涵養を目指して-」アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル2号 WEB版 査読無
- 3 影山陽子2010「大学学部授業におけるラ

イテイング・ワークショップの試み」アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 2号 WEB版 査読無

- 4 小笠恵美子 2010「ビジターセッションで参加者双方は何を得るか—留学生と日本時学生によるスピーチ作成に向けた会話の分析—」アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル2号 WEB版 査読無
- 5 岡本能里子(印刷中) 「国際理解教育におけることばの力の育成—大学における協働学習を通じた日本語教育からの提言—」日本国際理解教育学紀要 16 査読有

2009年

- 6 大島弥生 2009「ジグソー型ブックトークを通じた日本社会に関する知識の構築」日本言語文化学会, 言語文化と日本語教育, 82-85 査読無
- 7 大島弥生 2009「語の選択支援の場としてのピア・レスポンスの可能性を考える」日本語教育, 140, 15-25. 査読有(寄稿研究論文)
- 8 大島弥生・岩田夏穂・小笠恵美子・岡本能里子 2009「大学授業における留学生と日本語母語話者学生との協働の学びの場の設計」, 日本語教育学会 2009年度秋季大会予稿集, 55-66 査読有
- 9 池田玲子・原田三千代, 「ピア・レスポンスの現状と今後の課題」, 言語文化と日本語教育 2008年11月増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線—2008年度版—, お茶の水女子大学日本語文化学会, 46-83 査読無
- 10 岩田夏穂 2009「大学の日本語教員養成課程の文法授業における協働学習の試み」2009年度Web版報告書, 日本語教育学会, 1-10 査読無
- 11 三原祥子 2009「医学系学部におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」Speech Communication Education Vol.22, 37-46 日本コミュニケーション学会、査読有

2008年

- 12 茂住和世 2008「外国人留学生の考える, 日本人の「誘い」と「断り」—コンテキスト依存度を意識して作成した会話文から—」, 日本語教育学会秋季大会予稿集, 134-139 査読有
- 13 小笠恵美子 2008「留学生と日本人学生によるスピーチ作成にむけた会話の分析」言語文化と日本語教育, 36, 45-47 査読無
- 14 松本茂・吉武正樹・五十嵐紀子・三原祥子 2008「大学におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」、コミュニケーション教育研究会パネル『日本コミュニケーション学会第38回年次大会プログラム「コミュニケーション学と演劇」』19-20, 査読無

- 15 中村千賀子・星野晋・三原祥子・沖田一彦 2008「準備教育で忘れてはならないもの」医学教育, 39(238)増刊 特集 第40回日本医学教育学会大会予稿集, 37 日本医学教育学会, 査読無

2007年

- 16 大島弥生・佐野裕司・田村祐司・村松園江 2007「マリンスポーツ実習における海洋体験が受講生に与える影響—振り返りによる体験の深化へ向けて—」, 東京海洋大学研究報告3号10, 51-60 査読無
- 17 大島弥生 2007「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」, 言語文化と日本語教育, 33, 57-64 査読有
- 18 大島弥生 2007「大学生に期待される日本語能力とその養成手法—先行実践の分類をもとに—」, 言語文化と日本語教育, 33, 109-112 査読無
- 19 大島弥生 2007「大学基礎教育段階の授業の中で書かれた文章の構成要素と表現の特徴」, 社会言語科学会第19回大会発表論文集, 152-155 査読無
- 20 大島弥生 2007「レポートのアウトライン点検時のピア・レスポンスにみる情報の交渉」, 日本語教育学会 2007年度秋季大会予稿集, 109-112 査読有
- 21 小笠恵美子 2007「授業中のグループ作業に見られる話題展開—日本人大学生の場合—」, 日本語教育学会 2007年度春季大会予稿集, 263-264 査読有
- 22 小笠恵美子 2007「初級作文授業における協働的な学習活動」, 日本語教育学会実践研究フォーラム 2007年度Web版報告書, 査読無
- 23 岩田夏穂・小笠恵美子 2007「発話機能から見た留学生と日本人学生のピア・レスポンスの可能性」日本語教育, 133, 57-66 査読有

2006年

- 24 大島弥生 2006「初年次における「基礎ゼミ」と「日本語表現法」—共通点と相違点—」, 第23回(平成18年度)関東地区大学教育研究会報告集, 30-36 査読無
- 25 大島弥生・大場理恵子 2006「専門への橋渡しと動機づけをめざした大学学部入学直後からの日本語指導」, 2006年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 225-226 査読有
- 26 岩田夏穂 2006「大学初年次の文章表現の協働推敲(ピア・レスポンス)活動に見られるやり取りの様相—手順の指示と活動の展開との関連に注目して—」, 日本国語教育学会大学部会平成18年度報告書 査読無

[学会発表] (計19件) (略)

[図書] (計5件)

- 1 大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂編 2009 『大学の授業をデザインするー日本語表現能力を育む授業のアイデア』 1-261, ひつじ書房
- 2 池田玲子2009「教室の管理者から学習の支援者へ ピア・ラーニングの教師の学び」『日本語教育の過去・現在・未来』水谷修 監修 第2巻 河野俊之・金田智子編「教師」, 凡人社, 133-158
- 3 池田玲子2008「協働学習としての対話的問題提起学習」細川英雄編著『言葉の教育を実践する・探求する-活動型日本語教育の広がり』 凡人社, 62-81
- 4 池田玲子2008「批判的・論理的思考力とコミュニケーション力育成のための日本語表現法 日本語作文ピア・レスポンスの応用」 国立国語研究所編『日本語教育年鑑 2007年度版』, くろしお出版, 32-47
- 5 大島弥生 2006「大学初年次日本語表現科目でのアカデミック・ライティングのコースの設計」, 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』, 115-127, ひつじ書房

[その他]

ホームページ等

研究成果の一部を東京海洋大学附属図書館HP 機関リポジトリにて 2010年6月以降公開予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大島 弥生 (OSHIMA YAYOI)
東京海洋大学・海洋科学部・准教授
研究者番号: 90293092

(2) 研究分担者

池田 玲子 (IKEDA REIKO)
東京海洋大学・海洋科学部・教授
研究者番号: 70313393

岡本 能里子 (OKAMOTO NORIKO)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号: 20275811

影山 陽子 (KAGEYAMA YOKO)
日本女子体育大学・体育学部・講師
研究者番号: 60366804

佐々木 泰子 (SASAKI YASUKO)
お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号: 20251689

三原 祥子 (MIHARA NAKAKO)
東京女子医科大学・医学部・講師
研究者番号: 00343559

茂住 和世 (MOZUMI KAZUYO)

東京情報大学・総合情報学部・准教授
研究者番号: 20286181

(3) 研究協力者:

岩田 夏穂 大月市立大月短期大学・助教
大場 理恵子 東京海洋大学・非常勤講師
小笠 恵美子 東海大学・非常勤講師
加納 なおみ 早稲田大学・非常勤講師